

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：34307

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2023

課題番号：16K02220

研究課題名（和文）隠喩としての発達障害 近代性の精神分析的・精神病理学的研究

研究課題名（英文）Developmental Disabilities as a Metaphor: Psychoanalytic and Psychopathological Studies of Modernity

研究代表者

長田 陽一（NAGATA, Yoichi）

京都光華女子大学・健康科学部・教授

研究者番号：20367957

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：発達障害とりわけ自閉症に関して、従来なされてきた本質理解（原因追及）とは異なる観点から、発達障害という言葉（概念）を隠喩（メタファー）として捉えなおし、その諸作用を検討することを目的とした。調査研究において、実際の関わりの有無が 発達障害 概念におけるイメージ形成に影響することが認められた。また文献研究では、近代の終焉に現れた統合失調症が、いったん成立した近代主体が瓦解する過程で不気味で超越的な他者を呼び込むことになるのに対し、他者がいない自閉症の世界では、他者が存在しはじめるとき、少なくとも4つの異なる水準の主体が生じることが論じられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

20世紀初頭に現れ狂気の代名詞として脚光を浴びた統合失調症と、同世紀の後半それと主役の座が入れ替わるように現れた発達障害としての自閉症は、いずれも近代人が重要視した理性の対立項としての役割を担わされてきました。こうした仮説に基づき、本研究ではとくに自閉症のイメージやメタファーについて探求しました。精神疾患は、ある意味で時代や社会を裏側から照射しているもので、そこに付された意味合いを解読することは、われわれが想定する「人間なるもの」を時に浮かび上がらせることにもなります。そして近代的主体が過去のものになりつつある現代において、「来るべき人間」の探求への基礎をなすものだと考えます。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to reconsider the word developmental disorder as a metaphor and examine its various effects regarding developmental disorders. In research studies, it has been found that the presence or absence of actual involvement influences the formation of an image of the concept of developmental disorders. In addition, in literary studies, schizophrenia, which appeared at the end of the modern era, brings in an uncanny and transcendent other in the process of the collapse of the modern subject once established. But, in an autistic world without others, it was argued that at least four different levels of subject arise when others begin to exist.

研究分野：臨床心理学

キーワード：メタファー 発達 障害 歴史 主体 他者

1. 研究開始当初の背景

文部科学省は義務教育課程の通常学級における発達障害児(自閉症スペクトラム、アスペルガー症候群、AD/HD、学習障害等)の割合を6.3%とし、こうした通常学級に在籍して支援の対象とされなかった児童・生徒に対し、その教育的ニーズを把握し、適切な指導及び必要な支援を行う目的で、2007年に「特別支援教育」を学校教育法に位置づけることになった。発達障害概念は教育のみならず、今や現代社会を理解するうえで欠くことのできない用語となっている。

発達障害が概念としてのまとまりを得たのは1970年代に入ってからである。発達障害の中心につねに位置づけられる自閉症について述べれば、70年代末のウィング、L.(1979)による障害の「三つ組み」、対人反応の重大な欠陥、コミュニケーションの重大な欠陥、想像的な活動を行うことの重大な欠陥(象徴的遊びの困難性・常同行動など)によって、基本的な状態像はほぼ出揃ったといえる。

しかしその「本質」論についての議論は、時代とともに大きく変遷しながら、いまだ決定的と言える見解は出されていない。ラター、M.は70年代に言語認知障害仮説を一次障害として提唱したが、対人コミュニケーションや同一性保持(こだわり行動)を説明できなかった。80年代から、障害の「本質」をめぐる、知覚、共同注視(joint attention)、心の理論、実行機能、社会的認知等、数多くの仮説が提唱され一時的な流行をみたが、いずれも行き詰っている。さらに現在では、2013年のDSM-5により自閉症は自閉症スペクトラムのもとに整理された。これにより健常(定型発達)と発達障害の境界線が消失し、発達障害の概念は拡散の方向へ向かっている。

いわゆる世間一般という集合体から、発達障害者は何を押し付けられ、何を期待され、いかに必要とされてきたのか。これが、大学院附属の臨床心理施設および精神科クリニックで臨床心理実践に携わってきた申請者の日々の疑問であり、かつ本研究の基盤となる問題意識である。発達障害は今のところ原因を特定できず、時に「目に見えない障害」と言われるように、家族や本人さえも気づいていないことも多い。したがって、これまでなされてきた本質理解の努力と並んで、発達障害という言葉(概念)をかつての統合失調症(分裂病)と同様に隠喩(メタファー)として捉え直し、その諸機能を検討することが重要な今日的課題として浮かび上がってくる。

文献

American Psychiatric Association (2013) *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders: Dsm-5*, American Psychiatric Publishing; 5 edition.

Wing, L. & Gould, J. (1979) "Severe Impairments of Social Interaction and Associated Abnormalities in Children: Epidemiology and Classification", *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 9, pp. 11-29. Abnormalities in Children: Epidemiology and Classification", *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 9, pp. 11-29.

2. 研究の目的

発達障害(自閉症スペクトラム、アスペルガー症候群、AD/HD、学習障害等)とは、対人コミュニケーションや認知機能に独特の困難さを持ち、中枢神経系に何らかの機能障害が想定される、生まれながらの障害である。本研究では、発達障害を隠喩、すなわちイメージや情動を産出する一つの方法装置と捉える観点を提示し、これを思想的かつ精神分析的・精神病理学的に検討する。これにより、提起されて半世紀程のこの新しい概念が、現代において近代性(人間主義、合理主義、個人主義)を暗黙のうちに補強する構造と機能を明らかにし、同時にそれを内破する可能性を考察する。

3. 研究の方法

発達障害概念が近代(人間主義、合理主義、個人主義)をモデルとした「人間」の構造に与える影響について、日欧の文献考証を行い、思想的かつ精神分析的・精神病理学的に検討する。

4. 研究成果

本研究では19世紀末に精神医学の表舞台に現れた統合失調症と、同世紀の後半にそれと入れ替わるように現れた発達障害としての自閉症(ASD)を通して、近代主体の特徴と変遷について考察を行った。

統合失調症は人間の本質を解体の危機に陥れる狂気性を帯びている。しかし、ここでの人間は歴史的に構築された人間(近代主体)である。したがって周辺症状も含め多様な精神の群れを統合失調症(精神分裂病)としてまとめ上げるには、近代の終焉を俟って可能になったことが考察

された。

他方、自閉症は主体そのものの成立が成り立たないし、他者が存在しないともいえる。しかし、自閉症をはじめとする発達障害を主体の欠如と位置づける一連の議論は、単一の主体(近代主体)しか想定していない。本稿では心理療法や当事者の手記において、近代主体とは異なる4つの水準の主体を指摘し、さらに現代社会における新しい主体のあり方の重要性について示唆を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 長田陽一	4. 巻 61
2. 論文標題 統合失調症および自閉症をめぐる近代主体の再検討 内面の成立と終わりのない不安	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 67-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 長田陽一	4. 巻 45
2. 論文標題 精神療法のアクチュアリティと歴史的 人間 の再検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 精神療法	6. 最初と最後の頁 813 - 818
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長田陽一	4. 巻 12
2. 論文標題 メタファーの花々 花環的存在論について	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 京都光華女子大学大学院カウンセリングセンター研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 長田陽一，黒川嘉子
2. 発表標題 発達障害 のイメージに関する研究 - 関わりの経験および批判的思考態度の影響について -
3. 学会等名 日本心理臨床学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------